

歴史テキストにおけるフランス語の単純未来形—条件法との比較—

小川紋奈

1. はじめに

フランス語の動詞時制の一つである単純未来形 (*futur simple*、以降 FS と略記する) は、伝統的に *discours* レベルにおいて、発話時から後に事行を位置づける場合に用いられるとされている。つまり、発話者の発話時にはまだ未確定な後に起こる事行を述べる際に、FS を用いるということである。しかしながら、歴史テキストのように、過去に既に発生した出来事を語るテキストにおいても、FS がみられる場合がある。

(1) Des scènes de violence se déroulent au mois de mai 1413, à la suite desquelles est promulguée l'ordonnance qu'on appelle cabochienne, laquelle n'arrête pas le flot des violences de moins en moins contrôlées. Finalement, au pouvoir bourguignon, dans Paris, succédera celui des Armagnacs : (...) De plus en plus d'ailleurs se succèdent les batailles réglées et cette fois ce sont les cités de Bourgogne qui sont menacées : après Compiègne et Soissons, Laon, Saint-Quentin, Péronne et en général l'Artois ; c'est à Arras que la paix sera conclue entre Armagnacs et Bourguignons le 4 septembre 1414.

(*Jeanne d'Arc* 第1章, pp.7-8)

(一四一三年五月、多くの衝突が行われた末に、一般に「カボッシュ党の勅令」と呼ばれる法令が發布されたが、この勅令も、しだいに統制からはずれて頻発する暴力沙汰を止めることはできなかった。遂にパリでは、ブルゴーニュ公一派に代わってアルマニャック派が支配者となった。(…) しかも戦闘状況も好転し始めて、ブルゴーニュ派に組していた諸都市、まずコンピエーニュとソワッソンが、続いてラン、サン・カンタン、ペロンヌが、さらにフランス東北部のアルトワ地方全域も脅威を受け始めた。かくて一四一四年九月四日になって、アラスでアルマニャック派とブルゴーニュ派間の和議が成立することになる。

(*Jeanne d'Arc* 和訳書第1章, pp.12-13)

このように、物語ではなく実際に起きた過去の出来事を語る際にも、未実現の事行を表す FS を用いることができるのはなぜか。本稿では、*La Proclamation de la Commune* と *Jeanne d'Arc* をコーパスとして使用し、¹⁾ 一般に過去における未来を表す際に用いられる条件法 (*conditionnel*) と比較しながら、歴史テキストにおける FS と条件法の使用を可能とする仕組みとそれぞれの機能を観察し、差異を明らかにすることを試みる。

2. 歴史テキスト内で未来を語る時制と出現率

2. 1. *discours* と *histoire*

フランス語の動詞時制は、一般的に、Benveniste (1966, pp.238-245) が主張しているように、*discours* (発話) の時制と *histoire* (語り) の時制という二つのレベルに区分できるとされている。*discours* は対話者の存在を前提とし、*histoire* は対話者が存在せず、また発話者の直接的な表出や介在がないレベルである。

表 A discours と histoire における動詞時制

(Benveniste (1966, pp.238-245) と Maingueneau (1994, p.76) を参考に筆者が改変したもの)

discours		histoire (récit)	
passé composé	imparfait	plus-que-parfait	imparfait
	présent		passé simple
futur simple	futur périphrastique (va / doit+inf)	conditionnel	prospectif (allait / devait + inf)

しかしながら、歴史的現在と呼ばれる語りの現在形が存在するように、histoire に属する語りのテキスト内において、必ずしも表 A の通りに動詞時制が使われているわけではない。テキスト内における著者の考えや登場人物の会話等を除く語りの部分においても、時には discours に属する動詞時制も用いられ、単純未来形などの未来形も出現することがある。histoire のテキストに出現するこの単純未来形を歴史的将来 (futur historique、以降 FH と略記し、本稿では FS と表す時には FH を含まない) と呼ぶ。条件法も同様に、histoire のテキスト内で、未来を表す表現としてしばしば用いられるが、これを本稿では conditionnel historique と呼び、CondH と略する。そして、その他筆者の意見等を表す際の条件法を Cond と略することとする。

2. 2. FH の定義

FH に関しての先行研究はあまりないが、Wagner et Pinchon (1962) は以下のように述べている。

(2) Par ce tour, le narrateur crée un décalage expressif dans un récit dont les verbes sont à un temps du passé ou au présent historique. Fort de ses connaissances il évoque au moyen du futur des faits qui sont passés par rapport à lui, mais qui étaient à venir par rapport au moment où se situe l'histoire racontée : (Wagner et Pinchon, 1962, p.349)

(ここでは、語り手は、動詞が過去時制か歴史的現在である語りにおいて、表現的なずれを作り出す。自身の知識に支えられ、語り手は、自分にとっては過去であるが、物語られた歴史が位置づけられる時点と関連し未来であった事行に対して、未来形を用いて言及する。)

つまり、FH は語り手の知識に基づきながら、基準点とした過去の出来事からの前望的 (prospectif) な見方での叙述のなかで用いられる。また、Barceló et Bres (2006, p.111) は「(…) 語り手は現在に過去の時を虚構的に導いており、その現在では出来事を未来とみなすことができるのである。」と述べ、虚構的な現在の時間性を構成することが FH の使用を可能とするとしている。

2. 3. CondH の定義

Grevisse (1986) は以下のように条件法の一般的価値を定義している。

(3) Le conditionnel présent marque un fait futur par rapport à un moment passé. (Grevisse, 1993, p.1299)

(条件法現在とは、過去のあるときに対する未来の事行を示す。)

また Grevisse (1975, pp.733-734) では、過去から見た未来を表す条件法が持つ意味を考えるなら、ただの直接話法の FS や前未来から間接話法への転置 (transposition) であるため、そこには条件法が本来有する « l'idée de doute, d'éventualité, de condition » という意味価値は何ら存在しないとも述べている。さらに朝倉 (2002, pp.227-228) は過去を起点とした未来に関し、「単純未来形は語り手が事実として確認していることを述べるもので、単に予想された事実を述べる条件法現在とは異なる」と明確に述べ、二つは異なる価値を伴って使用されるとしている。このように、様々な先行研究ではこの二つの動詞時制が過去から見た未来を表すことができると確認されているが、違いとテキストへの影響等に関してはあまり分析されていない。

2. 4. 二つのコーパスの統計

コーパスである二つのテキスト LPC と JDA に出現する FS、FH、Cond、CondH の出現数を表示、グラフ化したものが下の表 B・図 A と表 C・図 B である。

表 B LPC の単純未来形と条件法の出現数

	FS	FH	Cond	CondH
4部	51	35	21	9
5部	43	47	22	17
6部	92	64	29	24
7部	25	37	7	1

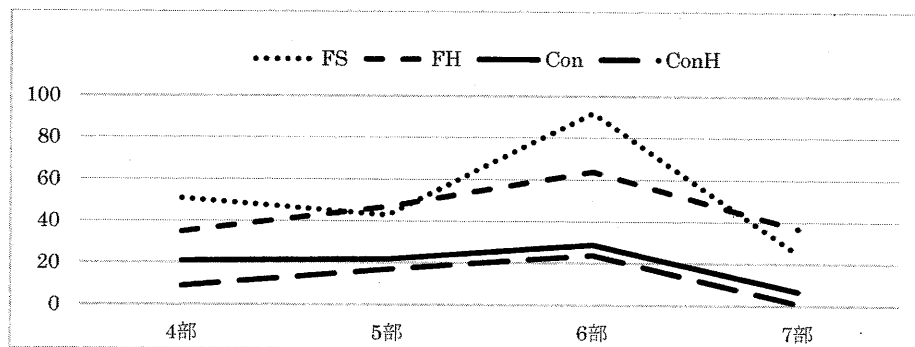


図 A LPCにおける未来表現の全体的な出現傾向

LPCでFSが多い理由としては、会話の挿入や手紙等の引用が非常に多いからである。語りの中の未来表現であるFHとCondHを比較すると、FHの方が多く結果となっている。過去から見た未来といえばCondHであるというイメージを裏切る結果である。Condの出現数は、あまり多くはない。全体を通して、ついにコミュニケーション宣言をする時とその直前を語るためテキストのクライマックスとなり得る終盤第6部にかけて、未来表現が多く用いられていることが確認できる。

表 C JDA の単純未来形と条件法の出現数

	FS	FH	Cond	CondH
1章	2	21	0	0
2章	2	13	11	1
3章	4	22	2	3
4章	8	7	6	5
5章	3	5	2	1

	FS	FH	Cond	CondH
6章	1	3	0	1
7章	19	37	24	6
8章	3	14	0	2
9章	1	6	1	2
10章	1	9	2	2

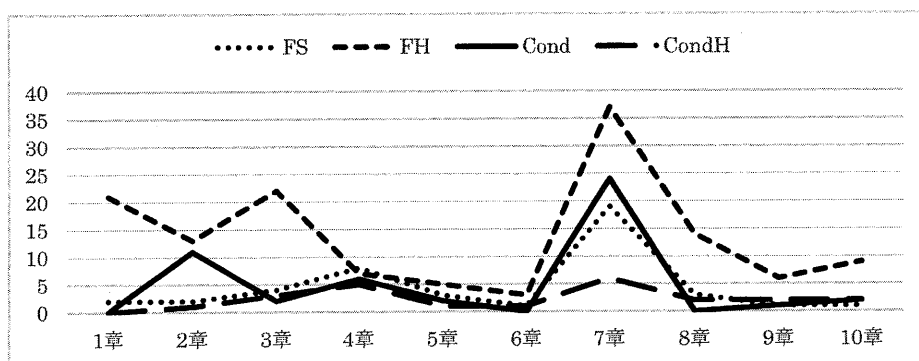


図 B JDA における未来表現の全体的な出現傾向

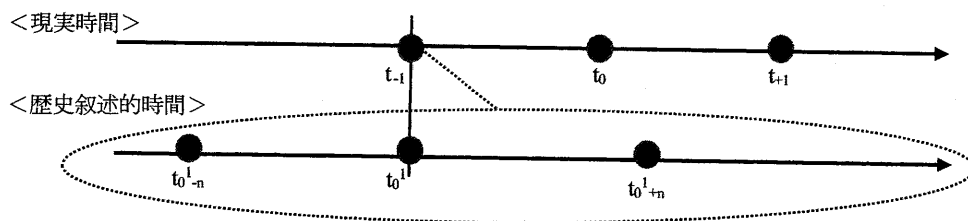
JDA では、FH の出現数の多さが顕著に見られる。対して、CondH はあまり見られないことから、未来を表す際には FH を主に使用することが確認される。Cond が次に多く見られる理由としては、このテキストでは著者の見解がしばしば Cond を用いて導入される傾向があるからである。こちらも処刑裁判の章でありテキスト叙述の山場と言えそうな第 7 章に、未来形が俄かに非常に多く用いられていることがわかる。

3. 歴史テキストの仕組み

3. 1. 二つの時間軸

歴史叙述の際に、なぜ歴史的現在や FH が使用されることが可能なのか。小川 (2016) で詳しく分析しているが、過去の既に実際に起きた出来事を語るため、歴史叙述は現実時間軸の過去の中に位置づけられるものと考えがちである。しかしそれでは現在形や未来形が使用可能なことが説明できないため、歴史テキストは二つの時間軸から成り立っていると仮定する。一つは現実時間であり、我々が実際に生活している日常的な時間である。我々は常に現在時 t_0 に位置し、時間は常に未来 t_{+1} に向けて進行し、その逆が過去 t_{-1} である。もう一つは歴史叙述的時間であり、この時間軸上の各時点の位置関係は現実時間と同じである。歴史叙述的時間のある時点は現実時間の t_{-1} に位置するが、この時点をお互いに発話時 t_0 に準ずる時点として歴史叙述の基準時 t_0' と表すことができる。FS は現実時間では発話時より後に事行を位置づけるが、歴史叙述

的時間では発話時は存在しないため、ある時点を基準時 t_0^1 とみなし、それを表す歴史的現在に立脚することによって、単純未来形や複合過去形等 *discours* に属すと言われる動詞時制の使用が可能となる。Benveniste (1974) は、時間は3つに区別できるとし、そのうちの一つである時系列的時間はカレンダーの時間であり、例えばイエス・キリストの誕生など何かの基準時から見て、出来事は以前 (過去)・以降 (未来) のいずれかに位置づけられるとしている。また、言語的時間の存在も提示し、「言語は必然的にある基準点から出発して時間を序列化するもので、この基準点はディスクール行為以外にはない。」と述べており、²⁾ 発話する、つまり歴史叙述では語るという行為によって基準点が初めて生まれ、その基準点から見た過去と未来も生まれるのである。さらに彼は、「話者は、現在として認めるものを、特有の言語学的形態を通じて、それがどの時点であれ、すべて「現在」として位置づける。しかし、この現在は発話のたびに更新される、文字どおり新たに未経験な瞬間なのである。」と述べている。³⁾ つまり、時系列的時間に位置づけられたある過去に生じた出来事が現在形によって表出されると、その瞬間から当該事態は語り手 (読み手) にとって「現在」として位置づけられることになり、FHはこの新たに導入された「現在」に対して後時的な事態を表出することになる。現実時間軸を時系列的時間と言い替え、過去のある時点を恣意的に擬似的現在として基準時 t_0^1 に定位すると、それに基づき歴史叙述の時間軸が構築される。この時間軸での擬似的現在の出現は、 t_0^1 の定位の度にそこには言語学的時間も発生するため、可能となるのである。このような仕組みによって、過去の事行を語る歴史テキストにおいて、*discours* に属する単純未来形を使用できるのである。



図C 歴史テキストにおける二つの時間軸

3. 2. FHの出現傾向

(5) (….) Les tentatives lyonnaises, en fin septembre 1870, montrent bien le péril de la situation et ses contradictions internes. Toutefois, ces contradictions ne pousseront pas loin leur oeuvre en province. Les ligues, les mouvements séparatistes, les émeutes républicaines, comme en mars les tentatives communalistes, seront facilement matés par le pouvoir. Coupés de Paris et de son mouvement républicain, démocratique et socialiste, nulle part les « rouges » de province ne parviendront à prendre en main les tendances décentralisatrices, à les orienter, à leur donner un double contenu, patriotique et social, en les organisant, en transformant en programme le projet. Quand la Commune leur tendra la main, ce sera trop tard, ou vainement. Si faible qu'il fut, le pouvoir Gambetta aura rétabli une autorité «

légale » et centrale, à défaut de sa principale mission et raison d'être : la contre-offensive victorieuse contre l'ennemi du dehors. (LPC 第4部1章, p.174)

((…)) 一八七〇年九月末のリヨンの試みは、状況の危険さと内在する矛盾を十分に示すものである。しかしながら、これらの矛盾が地方においてその作用を深く押しすすめることはないだろう。同盟や、分離主義の運動や、共和派の暴動は、三月におけるコミュン派の試みと同じく、権力によってたやすく屈服させられるだろう。パリと、その民主主義的で社会主義的な共和主義の運動から切り離された地方の《赤》は、どこにおいても、地方分権的傾向を掌握することも、それを方向づけることも、またそれらを組織し、企てをプログラムに変えることで、愛国的かつ社会的という二重の内容をそれらにあてることもできないだろう。コミュンがこれらの傾向に手をさしのべるのは、手おくれであるか、または空しいであろう。いかに弱体とはいえ、ガンベッタの権力は《合法的》で集権的な権威を再建することになるだろう。もつともそれは、外敵に対する反攻の勝利という主要な使命と存在理由には欠けるけれども。)

(LPC 和訳書『上』, pp.304-305)

FHの観察より明らかになった傾向は以下の通りである。まず、(1)のように、段落や章の終わりにしばしば用いられる。これは、3. 1. の歴史叙述的時間軸上において *prospectif* な視点から、FH が出現するまでのいくつかの事行 (歴史的現在形だけとは限らない) を書き手が局所的な小テーマに基づいてひとまとまりとして捉え、その中の継起的な一連の事行たちの最終地点を FH の使用にて表している。つまり、FH は叙述の方向性の提示と叙述の終着点を示す働きをしている。さらに、(5)のようにFH が連続して観察されることがある。これは映画等にある、過去に起きた事行がまとまって一種の世界を形成して提示される *flash back* に類似する機能であり、未来の先取りした出来事のまとまりが読み手の眼前に提示されている。これを *flash forward* と呼びたい。この機能は、Imbs (1960, p.46) が「この未来形 [=単純未来形, 引用者註] は、出来事の上での跳躍を表し、語りの展開において断絶をもたらす。」と述べているように、FH が立脚元となる基準時との断絶機能を持つことから可能となっている (詳しくは小川 (2016) を参照)。したがって、この一種の世界を形成する *flash forward* のように複数のFH を連続して用いると、継起的な語りから断絶し、事行の発生を読み手自らが実際に見ているようなイメージとなる。また、(6) を見てみよう。

(6) ((…)) Se glissant dans l'ombre, les sergents de ville s'approchent alors de la tour Solférino qui domine la Butte. Tout à coup une ombre se dresse devant eux ; c'est le garde national Turpin, désigné par le comité de la rue des Rosiers pour monter la faction. Il crie : « Qui vive ? » et croise la baïonnette. Aussitôt les gendarmes l'abattent ; il tombe, mortellement blessé, et mourra quelques jours plus tard. Les assaillants débouchent alors sur le plateau et désarment sans difficulté le faible poste de garde : 6 hommes du 61^e bataillon. ((…)) (LPC 第5部2章, p.241)

((…)) 暗闇にまぎれて市警官たちはピュットを見下すソルフェリノ塔に近寄る。突然人影が彼らの前に立ちふさがる。それは、ロジエ街の委員会から見張りに立つようにと命ぜられた国民衛兵のテュルパン Turpin

である。「誰か」と彼は叫び、銃剣をつき出す。すぐさま憲兵たちは彼を打ち倒す。彼は瀕死の重傷を負って倒れ、数日後には死ぬ。襲撃者たちはそこで丘の上に出て、手うすな哨所である第六一大隊の六人を難なく武装解除する。(…)

(LPC 和訳書『下』, p.54)

(1) でみられる sera conclue – le 4 septembre 1414 や、(6) の mourra – quelques jours plus tard のように時の副詞とともに用いられることも多い。これは、それまでの継起的な語りから時間副詞と共に一気に時間的跳躍を果たしている。(6) でわかるように、FH で示されている文の前後の文の事行は同じ時を指し展開は繋がっており、FH の持つ立脚する基準時との時間的断絶という性質が顕著に表れている。また、この生起時と立脚元との断絶の性質により、FH は一連の展開から離脱し補足説明を行う丸括弧 (parenthèses)、 – – (tiret)、 ; (point-virgule) や : (deux-points) との親和性も高い。(1) や (6) では ; と共起している。全コーパスからは、時の副詞や補足説明のマーカーとはだいたい 5 分の 1 の割合で共起していることが確認された。

3. 3. CondH の出現傾向

3. 2. に対して、CondH では FH に見られた傾向は確認されなかった。つまり、連続して出現したり、時間副詞とともに出現するといった現象はほとんど観察されなかった。これは、CondH には FH に見られたような断絶や跳躍の性質がないことに起因すると思われる。歴史テキストにおいてみられる条件法は、著者の意見を表した Cond が非常に多い。CondH がみられる場合は、多くの場合 (7) のように que 等の従属節内であり、主節が過去形のための時制の一致によるものである。

(7) Sa première étape est Auxerre le lendemain. La ville avait une garnison bourguignonne ; les troupes royales allaient camper trois jours sous ses murs tandis que se déroulaient des pourparlers qui faisaient mal augurer de la suite des événements : finalement les gens d’Auxerre fournirent vivres et denrées, mais n’ouvrirent pas leurs portes et s’engagèrent seulement à tenir la même conduite que celle que tiendraient les bourgeois des autres villes sur le parcours : Troyes, Châlons et Reims.

(JDA 第 4 章, p.52)

(最初の重要な目標となる町は翌日着いたオーセールであった。この町にはブルゴーニュ派の守備隊が置かれていた。王太子の軍は町側との折衝が行われる間、町の城壁の下で三日間幕営しなければならなかった。交渉は事態の見通しを明るくするものではなかった。ともかくもオーセールの市民たちは、食糧の供出は行ったが町の門は開くことはせず、単に予定された行程上の町々、トロワ、シャロン、ランスがすることになることと同じ行動をとることだけを約束したにとどまった。)

(JDA 和訳書, p.66, [一部加筆])

しかしながら、(8) のように、従属節内以外でみられないわけではない。

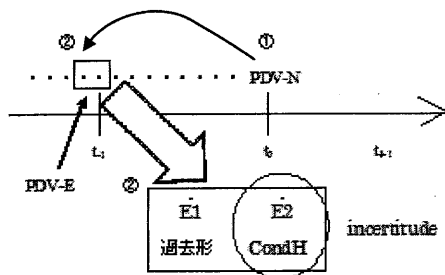
(8) La brigade Paturel, partant de la place Clichy, devait contourner le cimetière Montmartre par l’avenue de Saint-Ouen, la rue Marcadet, la rue des Saules. De là elle se porterait par la rue de Norvins vers le parc du Moulin de

la Galette. Pendant ce mouvement, un bataillon s'établirait en bas de la Butte, côté nord et ouest, le 17^e bataillon de chasseurs restant en réserve, à la disposition du général de division Susbille, boulevard de Clichy et place Pigalle, avec des gardes républicains et deux pièces d'artillerie. (LPC 第5部2章, pp.236-237)

(パチュレル旅団はクリシー広場を出発してサン＝トゥアン大通り、マルカデ街、ソール街をへてモンマルトル墓地を一周するはずであった。そこから、旅団はノルヴァン街を通過してムーラン・ド・ラ・ギャレット公園へ向かうことになる。この移動の間、一大隊がビュットの下、北と西側に布陣することになる。獵歩兵第一七大隊は、スビエル師団の將軍の指揮下におかれ、クリシー大通りとピガール広場に、憲兵と二門の大砲をもって予備として残される。) (LPC 和訳書『下』, p.47)

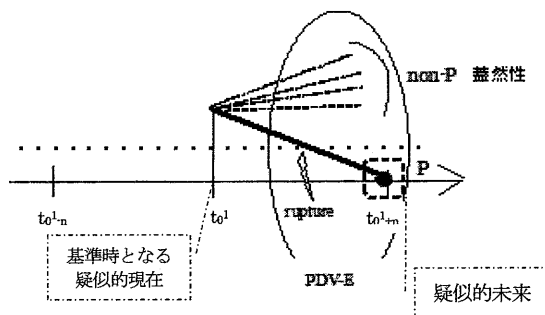
ここでは、過去形ベースで語られているところに、CondH が用いられている。過去が基準時となっていることから、その後の事行を表す際に FH ではなく過去から見た未来を表すといわれる CondH を使用することに違和感はない。これは、語り手や読み手 (point de vue du narrateur, PDV-N, ①) が現実時間軸上の現在時 t_0 からの rétrospectif (回顧的) な視点で過去ベースの事行を捉えていることを示す。したがって CondH を用いると、語り手と読み手にとっては歴史的事行を知識に基づいた伝聞として rétrospectif に、また客観的に見ているようなイメージである。(伝聞は原発話が過去になされるので、過去を基準時とする Cond と合う。)

<現実時間>



図D CondHの時間構造

<歴史叙述的時間>



図E FHの時間構造

(Pは実際に達成された事行を、non-Pは達成されなかった事行たちを示し、FHの蓋然性を表している。)

Benveniste (1966, p.241) は2. 1. 表Aのように、histoire (歴史叙述はこの下位分類に含まれる) は単純過去をベースとして用いる語りだと考えていた。そしてその歴史叙述の特徴に関して、「ここには誰も語るものはない; 出来事自身がみずから物語るかのようである」と述べている。また、条件法は、渡邊 (2014, p.68) によると、「P [事行, 引用者註] は発話時点 t_0 に直接定位されるのではなく、あくまでも PDV (t_{-1}) を介して、PDV (t_{-1}) からの後方性として定位される。そのため、P と t_0 との直接の前後関係はきまっていない。」これら二つの仮説から、自ら語る出来事自身の PDV (point de vue de l'événement, PDV-E, ②) が t_{-1} に存在し、そ

の PDV (t-1) 時点に対してのみの未来を CondH は示すと考えられる。このように、CondH の焦点 PDV-E はその事行自体とその前にのみ当てられとても小さいため (図 D)、実際に CondH で示される事行がその後との前後に起こったのか起こっていないのか、不確実性 (incertitude) の生じる余地を残す。このことは、CondH が時間副詞との結びつきが弱いことから裏付けられるだろう。全コーパス中 4 例しか観察されなかった。このように、PDV-E が断絶・跳躍を含むため (図 E)、一連の事行のまとまりを大きく捉えた上でその叙述の終着点となりやすい FH に対して、焦点が小さく不確実性を残す CondH は、一般にあるテーマに関する一連の記述のまとめである章や段落の終わりでの使用にもあまり向かないと言えるだろう。また以上のように、構造面では、歴史叙述的時間軸での一つの PDV である FH に対して、CondH での語りは現実時間軸からの rétrospectif な PDV-N と焦点の小さい PDV-E の、2 つの PDV が混在する複雑な仕組みとなっている。

つづいて、過去形ベースではなく現在形ベースの箇所にも出現可能なことがわかる例がある。

(9) (….) L'un des Internationaux les plus influents, Benoît Malon, soutient l'appel des maires légalistes et conciliateurs. Il ne cache pas son pessimisme en ce qui concerne l'action du Comité central et les élections. Il abandonnerait volontiers le mouvement révolutionnaire. Tel autre international influent, Goullé, prend la parole pour souligner que l'Internationale n'a qu'un de ses membres au Comité central, Varlin et que par conséquent sa responsabilité n'est en rien engagée. (….)

(LPC 第 6 部 3 章, p.320)

((….) もっとも大きな影響力をもつインターナショナル派の一人、ブノワ・マロンは、合法主義者と和解派の区長たちの呼びかけを支持する。彼は中央委員会の行動と選挙に関する悲観論を隠さない。彼は自ら革命運動を**放棄することになる**。また別の有力なインターナショナル派グーレは、インターナショナルは中央委員会にただ一人のインターナショナル会員ヴァルランを送っているにすぎず、したがってインターナショナルは何の責任も負わされないことを強調した発言をする。(….)

(LPC 和訳書『下』, p.205)

ここでは、現在形ベースでの叙述に、ふいに CondH が挿入され、また現在形ベースに戻る。これは、歴史叙述的時間での叙述中に、異質な現実時間が挿入されたことを意味する。つまり、丸括弧等のような挿入の機能を果たしているのではないかと考える。筆者が先に述べておきたい情報をあえて現実時間軸から挿入することで強調したい、つまり他の事行と比較して CondH の事行になにほどか重要さの価値が加えられる。FH と丸括弧を使用しない理由としては、丸括弧の使用には重要さの価値は付随せず、あくまで補足の情報という位置づけであり、強調の意味は有していないと説明できるだろう。

4. おわりに

本稿では、歴史テキストにおける 2 つの未来表現の仕組みと機能的差異を考察した。その結果、次の 5 点が確認された。1. FH、CondH とともに歴史的現在ベースでも、過去形ベースでも用いられることができる。2. FH は歴史テキストの中で FS の意味価値を有するものとしては使用されていない。また、CondH も

同様に、過去における未来を表すという価値のみを有し、Cond 本来の意味価値は排除される。3. FH は歴史叙述的時間軸上での t_0' を基準点とし、PDV-E のみの prospectif な視点で用いられ、CondH は現実時間上での t_1 からの PDV-E とともに、 t_0 からの rétrospectif な視点 PDV-N を伴って用いられる。したがって、FH は基準時 t_0' を設定する語り手と読み手自らが実際に見ているようであり、CondH を用いると語り手と読み手が知識に基づいて伝聞として客観的に見ているようである。4. FH と CondH はどちらもある種の後方性を示すが、FH は断絶を伴った跳躍・先取りの性質を持つため、大きな焦点を持って跳躍先であり一連の叙述の終着点である FH の方向に事行が進む、つまり FH は事行の発生が前提である。一方、CondH はその事行とその前だけに小さく焦点が当てられ、過去形ベースではそれに付随し事行の発生に不確実性の生じる余地を与える。現在形ベースでは、挿入という機能と強調したい情報という付加価値を担う。5. 文体論的視点より、時系列に沿った過去形や現在形みの語りよりも、FH を使用することでドラマチックな物語展開の付与を可能としている。さらに CondH を混ぜることで、事行を捉える視点が入れ換わり、読み物としてのアクセントとなっている。今回は条件法との比較に限ったため、歴史テキストに出現する他の未来表現である迂言的未来形 *va+inf*、*allait+inf* との比較は別の機会に論じたいと思う。

註

- ¹⁾ *La Proclamation de la Commune* は、著者の意見や考え等が多い章以外の、第4部から第7部第2章までをコーパス対象とする。また、以降、*Jeanne d'Arc* は JDA と略記し、JDA 和訳書とは、『ジャンヌ・ダルクの実像』(1995) を指す。さらに、*La Proclamation de la Commune* は LPC と略記し、LPC 和訳書とは、『パリ・コムニオン』(2011) を指す。
- ²⁾ エミール・バンヴェニスト和訳書, 2013, p.73.
- ³⁾ エミール・バンヴェニスト和訳書, 2013, p.72.

参考文献

- Barceló, G.J. et Bres, J. (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.
- Benveniste, E. (1966) : *Problèmes de linguistique générale I*, Gallimard.
- Benveniste, E. (1974) : *Problèmes de linguistique générale II*, Gallimard.
- Grevisse, M. (1975) (1986) : *Le Bon Usage*, Duculot.
- Imbs, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- Maingueneau, D. (1994) : *L'Enonciation en linguistique française*, Hachette.
- Wagner, R. L. et Pinchon, J. (1962) : *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette.
- 朝倉季雄 (著)・木下光一 (校閲) (2002) : 『新フランス文法事典』白水社。
- ヴァルター・ベンヤミン (著)・今村仁司ほか (訳) (2003) : 『パサージュ論』第3巻, 岩波書店。
- エミール・バンヴェニスト (著)・阿部宏 (監訳)・前島和也ほか (訳) (2013) : 『言葉と主体：一般言語学の諸問題-』岩波書店。
- 小川紋奈 (2016) : 「歴史テキストにおけるフランス語の単純未来形の機能に関する研究 — *La Proclamation de la Commune* をコーパスとして—」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』31, pp.25-79.
- 渡邊淳也 (2014) : 『フランス語の時制とモダリティ』早美出版社。

文例出典

- Lefebvre, H. (1965) : *La Proclamation de la Commune, 26 mars 1871*, Gallimard.
- Pernoud, R. (1981) : *Jeanne d'Arc*, P.U.F., « Que sais-je ? »
- アンリ・ルフェーヴル (著)・河野健二ほか (訳) (2011) : 『パリ・コムニオン』(上)(下), 岩波書店。
- レジヌ・ペルヌ (著)・高山一彦 (訳) (1995) : 『ジャンヌ・ダルクの実像』, 白水社。